# 米原駅構内出土の汽車茶瓶　*米原町*

鉄道を使って旅する楽しみの一つに駅弁があります。駅弁を買えば必ずお茶も買い求めるのではないでしょうか。今は自販機で缶入りのお茶を購入しますが、以前はポリ茶瓶が主流でしたし、さらに昭和30年代までは陶器製の茶瓶でした。

この汽車茶瓶は静岡駅で明治22年に販売されたと伝えられ、当時は益子焼、信楽焼、常滑焼の二合、三合土瓶が使われていました。今回は米原駅構内より出土した汽車茶瓶を紹介します。

現在ＪＲ米原駅は大規模な工事がおこなわれており、紹介する茶瓶も造成工事中にゴミ穴（土壙）から一括で出土したものです。出土した茶瓶には「金五銭」とあることから、昭和５年から昭和18年までに生産されたものであることがわかります。

生産地は瀬戸で、石炭窯で鋳込みによって量産されたものです。胴部に「ぬまづ桃中軒」「東華軒」と駅名や店名が刻印されており、東海道線の沼津駅で購入されたものが、終点米原駅で投棄されたものと考えられます。ちなみに神戸ハーバーランド遺跡からは「米原」と墨書された汽車土瓶が数点出土しており、米原駅で購入した土瓶が投棄されたものです。

文化財と呼ぶにはまだまだ新らしい時代のものですが、鉄道とともに発展してきたマチ「米原」を知る重要な歴史的資料といえるのではないでしょうか。（中井　均）

米原駅構内より出土した汽車茶瓶

## 情報 BOX

◆米原町教育委員会では昨年度文化庁の補助を受け、醒井宿の伝統的建造物群保存対策調査を実施しました。今般その報告書が刊行されました。
『旧中山道宿場町醒井－伝統的建造物群保存対策調査報告書』（非売品）
◦問い合わせ先
米原町教育委員会社会教育課
0749（52）1551

◆伊吹町教育委員会では５月24日より、７月末まで大字曲谷に所在する起し又遺跡の発掘調査を実施する予定です。この遺跡は昨年度の試掘調査で、縄文時代早期から後期に至る土器が出土しており、今回の調査は大いに注目されます。調査成果の概要は「佐加太」第３号の表紙を飾ってくれることでしょう。
◦問い合わせ先
伊吹町教育委員会生涯学習課
0749（58）1121

◆今秋、大津市歴史博物館で企画展「近江の古代を掘る－土に刻まれた歴史－」（10／14〜12／３）が開催されます。伊吹町伊吹遺跡出土の石棒や米原町筑摩佃遺跡出土土偶、近江町塚の越古墳出土石見型盾型埴輪をはじめ、坂田郡内から出土した遺物が数多く展示されます。ぜひお出かけ下さい。

## ◆◆編集後記◆◆

「佐加太」第２号をお届けします。創刊号では意気込んで、５月に第２号を刊行すると明言したものの、編集子の怠慢から蝉しぐれを聞きながら、この編集後記を書いております。第３号は11月上旬にお届けします。絶対！、たぶん、できれば？…。

さて、郡内の文化財担当者はイコール埋蔵文化財の担当者であり、どうしても紙面の大半が発掘調査の成果速報という性格になってしまいます。最終ページはこうしたもの以外を掲載していく予定です。今回は汽車茶瓶を取り上げてみました。次号では何が登場するか、乞御期待。


坂田郡文化財ニュース
佐　加　太　第２号
発　行　平成７年５月31日
編　集　坂田郡社会教育研究会文化財部会
事務局　〒521滋賀県坂田郡米原町下多良３－３
米原町教育委員会社会教育課
0749（52）1551
印　刷　立木印刷





坂田郡文化財ニュース
# 佐加太

第　２　号
1995年５月31日
滋賀県坂田郡社会教育研究会
文　化　財　部　会


佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

# 杉沢遺跡土器棺墓の調査

*伊　吹　町*

杉沢遺跡は、伊吹山から流れでる弥高川がつくりだした扇状地上にあります。

杉沢遺跡で初めて学術調査が実施されたのは昭和13年です。京都大学の小林行雄らにより、縄文時代晩期後半の合わせ口甕棺（土器棺）が２基発掘されました。

杉沢遺跡の土器棺は、『改訂近江國坂田郡志』の記載で７基、昭和29年頃に１基発見されていて、今回の調査で９例目ということになります。調査結果が報告されているのは、昭和13年の２基だけで、昭和29年のものは、個人所有の写真から出土状況を確認することができます。

今回の調査は、耕作中の発見によるもので、土地所有者の快諾を得て１月中旬におこないました。出土地点は、県道山東本巣線の東側の柿畑で、昭和13年の調査地点から約20ｍ東にあたります。標高は約161ｍです。

土器棺は、地表約20㎝下で検出しました。ほぼ南北に主軸をおき、水平の状態で置かれていました。２つの甕型土器を使用し、北側の土器（図１）は完形のまま横位水平におかれ、南側の土器（図２）は、埋設時に土器の一部を割って、これを１のふたとして立てかけ、残りの部分で、１の逆方向から、そのほぼ半分をおおいかぶすように置かれていました。また、土器棺内の土を精査した結果、若干の炭を検出しました。

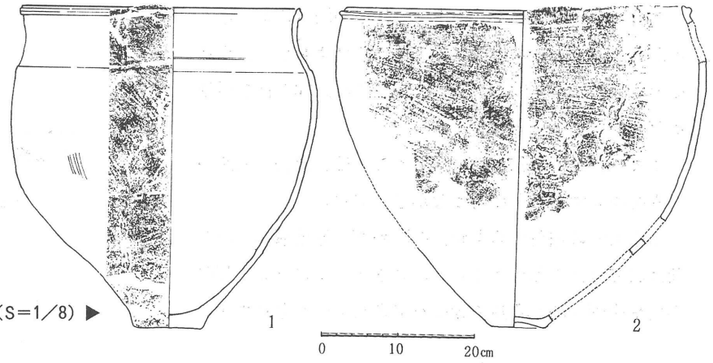
昭和13年や昭和29年の資料は、ほぼ同型同大の甕型土器の口を合わせた使用法で「合わせ口土器棺」とよばれています。今回の出土例は、１個体の土器を埋設し、別の１個体の破片でふたをする「合わせふた」と、さらに、残りの部分でおおいかぶす使用法を折衷した方法で、土器棺墓埋設方法を考えるうえでも貴重な資料です。

１は、口径35㎝、高さ42㎝。頸部でゆるやかにくびれて外反する口縁部をもち、口縁に素文の凸帯を１条めぐらしています。土器の表面には斜め方向の条痕文がみられます。近畿系の縄文時代終末の土器と考えられます。

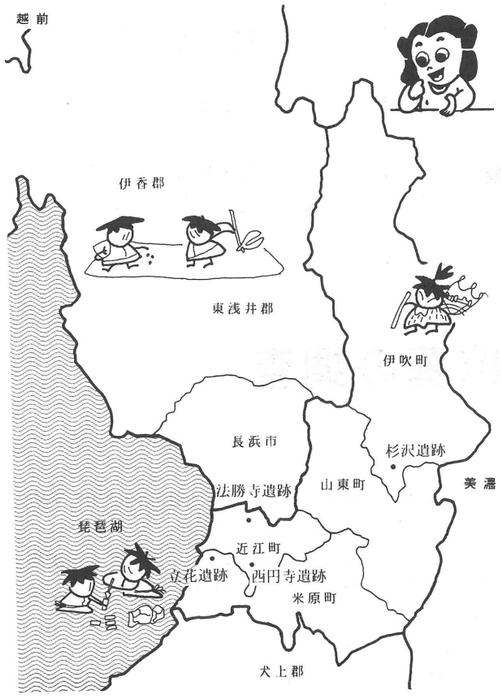
２は、口径43㎝、高さ41㎝の砲弾型の土器です。口縁部に１条の素文の凸帯をめぐらせています。土器の表・裏面とも、斜め方向の条痕文がみられます。器形などから、東海地方の馬見塚式土器と考えられます。

杉沢の土器棺に使用されている土器のほとんどが２のタイプで、１のタイプは、今回がおそらく初見です。杉沢遺跡の土器棺墓は、東海地方の影響を強く受けて成立していると考えることができます。（高橋順之）

▲ 出土状況




土器実測図（S＝1／8）▶




## 坂田郡の遺跡案内　*弥生時代編*

郡内の山間部で縄文時代晩期末葉の墓制が営まれた頃、琵琶湖岸に近い地域では、弥生式土器を使った新しい生活が始まります。

弥生時代は、水稲耕作が導入された時代ですが、坂田郡で最も古い稲作資料として、杉沢遺跡出土の縄文時代晩期末葉の深鉢にモミ圧痕の存在が知られています。

立花遺跡は、低湿地に営まれた集落遺跡ですが、ここでは玉造り工房に関連する資料が確認された他、畿内・東海両地方の土器が混ざりあって出土しており、文化の交差する地域性が指摘されます。

法勝寺遺跡は、中期から後期まで築かれ続けた墓域で、「方形周溝墓」と呼ばれる地域のリーダーの墓が100基以上確認され、さらには「前方後方形周溝墓」と呼ばれる特異な形の墳墓も出現します。

西円寺遺跡は、後期の集落遺跡ですが、板壁構造を持ったと思われる方形竪穴住居跡の他に、集落の外周を巡る大溝などが発掘されており、次第に大掛かりになる集落構造を知ることができます。

## 持ち運ばれてきた土器　*米原町*

遺跡の発掘調査をしていると土の中から、実に様々な“もの”が出てきます。中でも私達に一番身近なのが、土器と呼ばれる土で作られた焼き物でしょう。

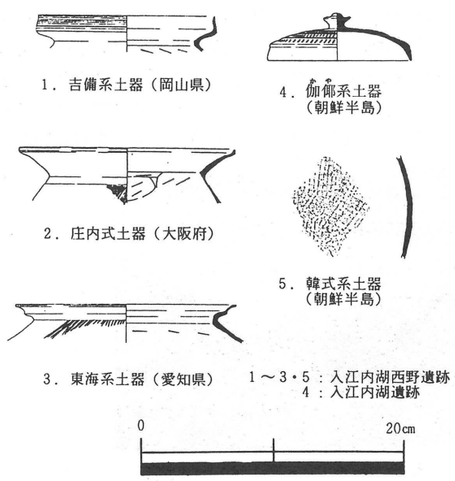
土器は縄文時代から現代にいたるまでおよそ１万年の永きにわたって、形や焼き方を変えながら途絶えることなく作られ続けています。また地域によって模様や形や作り方が異なっています。まさしく所変われば品変わるといった感じです。

これらの土器は様々な理由で、他の地域へ移動することがあります。土器自身が勝手に動くはずもなく、当然その背景には政治的、経済的、思想的な人間の社会活動が存在しているはずです。

つまり、土器の動きを追求することは、過去の人間の営みを復元することにもつながるのです。

米原町内の遺跡からも時代を問わず、他地域から持ち運ばれてきた土器がよく見つかります。中には遠く朝鮮半島や中国大陸から持ち運ばれてきたものもあります。

今回は古墳時代の土器の中から、その一部を紹介しておきます。（土井一行）






## 石見型盾形埴輪　*近江町*

滋賀県北部の中後期古墳群を代表する「息長古墳群」には、横穴式石室導入期の前方後円墳とされる「塚の越古墳」「山津照神社古墳」が所在します。この２つの古墳は、共に全長46ｍ級の規模を測り、出土遺物の年代観から、塚の越古墳は６世紀初頭、山津照神社古墳は６世紀前葉に築造されたものと推定されています。

塚の越古墳では、1989年に墳丘裾部の発掘調査が実施され、墳丘葺石部と周濠部の境目あたりに一定間隔で並ぶ「石見型盾形埴輪」が10個体確認されました。また、明治15年に石室が一度開かれた山津照神社古墳においても、1994年に京都大学文学部考古学研究室が実施した裾部の発掘調査で同種の埴輪が発掘されました。

この埴輪は、畿内を中心として分布していますが、滋賀県内での出土例としては、上記２基の古墳に限られており、特異な意味をもつ古墳と推測されます。

石見型盾型埴輪
（塚の越古墳出土）

## 大原氏館跡（大原判官屋敷跡）　*山東町*

近江の秀峰、伊吹山の南西麓に広がる扇状地“大原野”。その広大で肥沃な平野には古代から営々と続く人々の暮らしがあり、現在、多くの遺跡の所在を確認することができます。

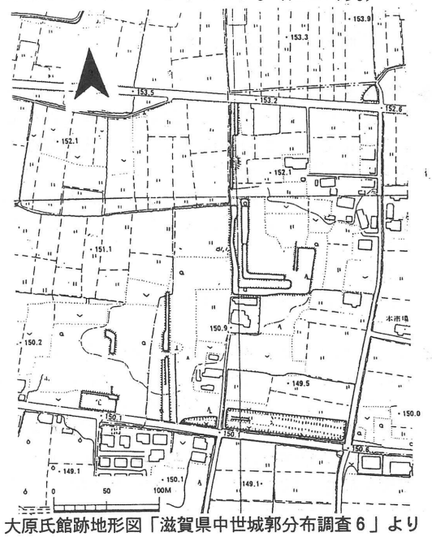
この大原野の南端部、本市場集落の西側に大原氏館跡（大原判官屋敷跡）は位置しています。

当館の主であった大原氏は、鎌倉時代近江を治めていた佐々木信綱の子、重綱を始祖とし、鎌倉幕府御家人として大原荘を本拠としていました。

室町時代には８千貫の地頭として将軍の奉公衆に列していましたが、後に佐々木宗家の六角氏より継嗣がなされ、織田信長の時代六角氏と共に滅亡したとされます。現在、竹林・植林の中に南北約80m、東西約50mにわたってＬ字状に堀及び土塁が良好な形で残存しています。そうした中、堀の南側でいわゆる二重土塁と言い伝えられてきた外側の土塁状盛土部分に町道が新設されることになり、若干のルート変更後、平成５年１月～２月にかけて調査を実施しました。

調査の結果、土塁の痕跡は確認できず、従来より言い伝えられてきた二重土塁ではないことが判明しました。そして、この盛土は館廃絶後周辺の耕作地の開発等による残土などが偶然的に土塁の形状を呈していたのではないかと思われます。また、堀との関係は調査区の限界から確認できませんでした。

今回、従来より言い伝えられてきた土塁ではなく、大原氏館跡との関連性も確認されませんでした。今後、こうした“確認されなかった”という事実を重要な要素として蓄積していきたいと考えます。（桂田峰男）



大原氏館跡地形図「滋賀県中世城郭分布調査６」より